

「何ができるか」を自問（震災 50 日 議員は走る）民主党 石山敬貴氏

日経新聞電子版 2011/5/6 19:48

東日本大震災から 50 日が経過した。被災地に残った傷痕、悲しみはなお深い。被災地出身の国会議員らはどう動いたのか。第3回目は民主党の石山敬貴を追った。（敬称略）

3月25日、宮城県塩釜市で被災者から要望を聞いて回る石山敬貴(右から2人目)＝事務所提供

「父も震災の犠牲者です」。4月25日、民主党衆院議員の石山敬貴(41、宮城4区)は地元で知人の親族の葬儀に参列した。故人は東日本大震災後の停電でコタツや電気毛布が使えなかったため、持病の肺気腫に肺炎を併発した。「各地域にきめ細かく、燃料の備蓄体制が整っていれば……」。石山はつぶやく。

地震が発生した時は地元に戻るため、東京駅にいた。車で新潟、山形を経由、通常の倍以上の12時間かけて地元入りしたのが3月13日。それから2週間、地元には張り付いた。

選挙区の宮城県大崎市や塩釜市など12市町村に加え、東京を離れられない民主党国会対策委員長の安住淳(49)の地元も回った。21の自治体の災害対策本部などを訪問。1回生議員なりに、被災者の声は党本部を通じ、政府に伝えたいつもりだ。

ただ、歯がゆさも感じる。「被災者は国会議員の権限は知事以上だと思っているが、実態は大きく違う。じくじたる思いは日に日に大きくなる」。無力感と無念さ。それはスピード感のない政府の対応へのいら立ちと表裏の関係だ。

4月10日、石山は農地の造成や水路の整備などを進める土地改良事業の関係者とともに、大崎市の被害状況を視察した。農家は田植えの時期を控え、水路やため池などの復旧作業を急がないと絶望的だと口をそろえたが、石山の目には同行した財務省や農林水産省の職員が「そろそろついて回るだけで、平時と変わらない」ように映った。

石山は「自治体が把握している被害額に応じて国が概算金を渡すなど、臨機応変に対応しないと後手後手になる」と語気を強める。

震災発生を受けて自身でまとめた提言には、被災地の声を生かした。交通インフラが整わない東北では、都市部以外にも備蓄拠点を作り、食料や燃料を確保する体制づくりが必要だと明記した。

自衛官や警察官などのメンタルヘルスの重要性も盛り込んだ。石山の弟は宮城県で消防士を務め、現在も行方不明者の捜索にあたる。「目をつむっていてもがれきの下の遺体が見えてしまう。救助活動の訓練はしてきたが、遺体を見る訓練はしていない」と苦悩する弟の言葉を反映したのだ。

新人議員の有志と一緒に勉強会も設立した。

「党内のグループを超えて、1回生が一丸となってこの難局を乗り越えなければならない」。19日、第1議員会館に集まった45人には元代表の小沢一郎(68)に近い議員だけでなく、前外相の前原誠司(49)や財務相の野田佳彦(53)を支持するグループもいた。

石山自身はどのグループにも属さない「中間派」を自任する。そんな石山にも「党内政局」の風は吹いてくる。

20日夜、旧知の議員に誘われて東京・赤坂のすし屋に向くと、突然、小沢が現れ「1年生なんだから何ができるわけでもない。だけど国会議員が避難所に顔を出せば安心感を与えられる」と諭された。

自分に何ができるのか。石山は被災地を回りを続けながら自問を繰り返している。

<http://www.nikkei.com/news/special/side/article/g=96958A9C93819481E2E0E2E6938DE2E0E2E7E0E2E3E3E2E2E2E2E3;q=9694E3E3E2E1E0E2E3E3E5E3E7EA;p=9694E3E3E2E1E0E2E3E3E5E3E1E6;o=9694E3E3E2E1E0E2E3E3E5E3E1E1>

